宮内原用水完成三〇〇年 その3

治水工事がもたらしたもの

これまで、天降川川筋直しと宮内原用水路について紹介しました。今回は、これらの治水工事がその後、当地域や薩摩藩にどのような影響をもたらしたのかについて紹介します。

川筋直し後の国分平野

天降川の川筋直しの完成は、国分平野にどのような変化をもたらしたのでしょうか。

①河川の氾濫がなくなった。
②新たに約四〇〇ヘクタールの水田ができた。
③麓（国分中央）、府中、広瀬などとの行き来が容易となった。
④城下町の拡大が可能となった。

このように、国分地域は、地形の変化に伴い水害のない安心で安全なまちへと大きく変わり、新田による農業の振興、城下町や道路などの整備に伴う流通経済の向上などにより、それまで以上に発展していきました。

水田が完成するには「享保元（一七一六）年、国分の国分郷新田完成」の記録によると、約四〇〇ヘクタールの河床の整地や道路、用排水路の整備などに、約五十年の歳月を要したことが分かります。

宮内原用水で見る土木技術

宮内原用水の完成によって、これまで畑地でしか利用できなかった約四三六ヘクタールの耕作地が水田に変わり、地域の人々を大いに潤しました。

この工事で注目されるのは、土木技術の高さです。宮内原用水の主要部分の勾配は千メートル分の五十センチ、つまり二キロで一メートル下がるという極めて平坦な勾配でした。しかも山の地形に合わせて水路が曲折していることや用水路の行程の大部分が※溶結凝灰岩であり、これを穿って水路を造ることを考え合わせると、当時の測量技術の正確さと土木技術の高さに驚かされます。

また、用水路の途中の嘉例川と西光寺川の川底を通す「潜り」という工法や、幅広い水路の崩落を防ぐための二穴の隧道は、一見コストが掛かり難工事と思われますが、完成後の維持管理を考慮すると非常に経済的な工法であったことが分かります。

薩摩藩の土木技術

天降川川筋直しや宮内原用水の整備をはじめとする江戸時代初期から薩摩藩領内で行われてきた土木事業は、災害に強いまちづくりや、多くの美田を提供し、地域住民や薩摩藩を潤しました。

薩摩藩領内の治水工事などで培われた土木技術は、その後、宝暦五（一七五五）年の岐阜県の木曽三川治水工事に生かされます。

木曽三川とは、岐阜県南西部から愛知県北西部にかけて広がる濃尾平野を流れる木曽川・揖斐川・長良川のことです。当地域はこの河川の氾濫よって毎年のように水害が発生していました。

薩摩藩はこの木曽三川の治水工事を江戸幕府から命じられ、多くの犠牲者を出し巨額の資金を費やして完成しました。手伝い普請は、幕府が各藩の経済力を削ぐ政策とされていますが、果たしてそれだけの理由で薩摩藩に命令したのでしょうか。

木曽三川治水工事は、天降川川筋直しから八十八年、宮内原用水完成から三十八年が経過して行われました。工事で用いた土木技術は、江戸幕府役人が指示した工法もあるでしょうが、薩摩藩内で培った技術が基礎となり、大いに役立ったのではないでしょうか。

今年は、天降川川筋直し三五〇年、宮内原用水完成三〇〇年の節目の年に当たります。この二つの大事業の背景にある治水・防災・灌漑、土木技術などについて、あらためて顕彰することで、当時の人々の思いを考えるよい機会になるのではないでしょうか。

（文責＝鈴）

木曽三川の川筋（提供：海津市）

※巨大噴火によって堆積した火山灰がその熱と圧力によって融解して石化したもの。